

シニア世代の子育て支援アンケート調査

鎌倉女子大学

佐藤淑子 廣田昭久 飯村敦子

調査の概要

【調査の目的】

本研究は神奈川県で大学発・政策提案制度に応募し、採択された「少子高齢社会における「かながわ多世代子育て・孫育てコミュニティ構築事業」の一環として行うものです。孫育て・たまご（他孫）育てに意欲を示すシニア世代の規定因を探る目的で、質問紙調査を実施しました。

【調査方法】インターネット調査(株式会社 マクロミル社による)

【調査対象】

55歳～74歳の男女を均等に割り付けました。「ボランティア団体」や「子育て支援に関する団体」の参加者・非参加者がほぼ半数になるようにスクリーニングを行いました。

【サンプル数】

- ①「ボランティア団体」や「子育て支援に関する団体」に参加している・アフターコロナでは再び参加したい男女 611名
- ②「ボランティア団体」や「子育て支援に関する団体」に参加したくない・関心がない/したいと思うがしていない過去には参加した経験がある男女 738名

【調査期間】2021年8月

【調査項目】

- ① 世代性尺度（丸島・有光，2007）、②生活満足度尺度（古谷野・柴田・芳賀ほか，1989）、③孫育て参加の理由（宮中ほか，1995）、④社会参加活動（片桐，2012）、⑤性別役割分業意識、⑥家族構成、⑦孫に関する情報（森田，2017）、⑧血縁者以外に向けた地域の子育て支援への興味、⑨子育て支援に関わる研修やワークショップの希望（斎藤，2014）、⑩孫育てに関わる理由

【結果】

【基本的属性】

調査対象者の基本的属性を表1に示します。

表 1 調査対象者の基本的属性

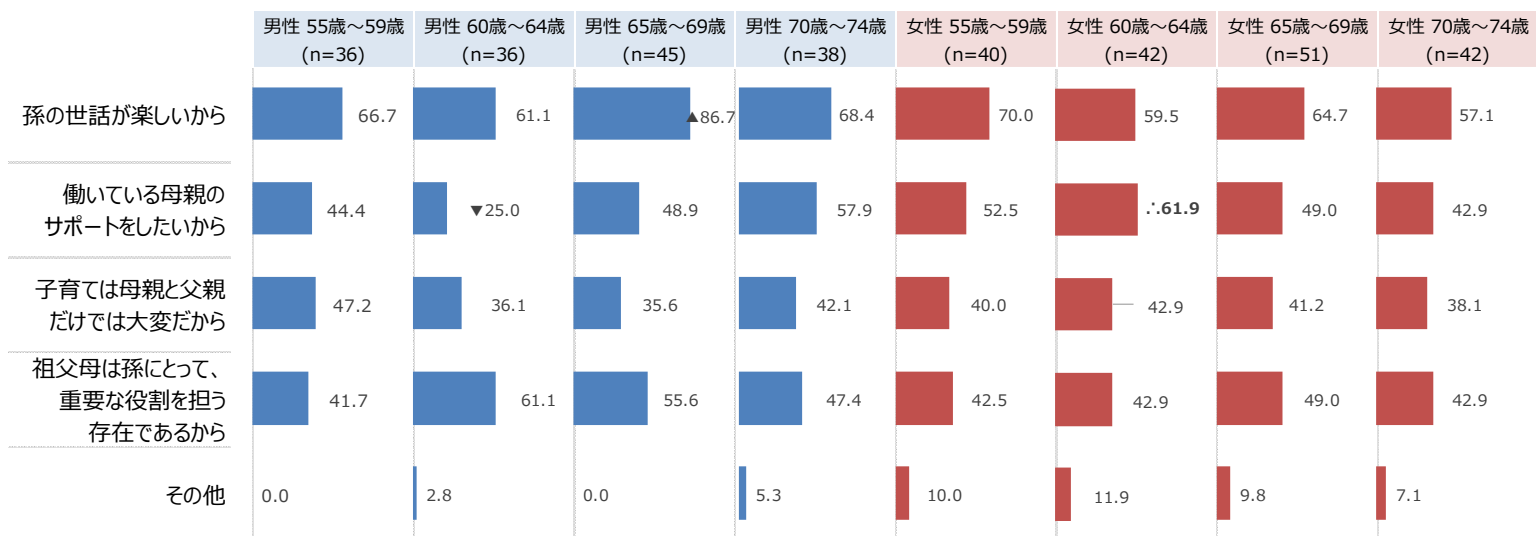
		55歳～59歳 (n=305)	60歳～64歳 (n=330)	65歳～69歳 (n=360)	70歳～74歳 (n=354)	全体 (n=1349)
性別	男性	157 (51.5)	167 (50.6)	181 (50.3)	179 (50.6)	684 (50.7)
	女性	148 (48.5)	163 (49.4)	179 (49.7)	175 (49.4)	665 (49.3)
未既婚	未婚	62 (20.3)	66 (20.0)	65 (18.1)	89 (25.1)	282 (20.9)
	既婚	243 (79.7)	264 (80.0)	295 (81.9)	265 (74.9)	1067 (79.1)
子ども	有	254 (83.3)	282 (85.5)	308 (85.6)	300 (84.7)	1144 (84.8)
	無	51 (16.7)	48 (14.5)	52 (14.4)	54 (15.3)	205 (15.2)
孫	有	184 (60.3)	205 (62.1)	236 (65.6)	236 (66.7)	861 (63.8)
	無	121 (39.7)	125 (37.9)	124 (34.4)	118 (33.3)	488 (36.2)
孫の数		2.1	2.4	1.8	1.4	1.9
就業 状況	フルタイム	153 (50.2)	110 (33.3)	56 (15.6)	15 (4.2)	334 (24.8)
	パートタイム	54 (17.7)	75 (22.7)	54 (15.0)	51 (14.4)	234 (17.3)
	自営業	22 (7.2)	36 (10.9)	46 (12.8)	27 (7.6)	131 (9.7)
	なし	76 (24.9)	109 (33.0)	204 (56.7)	261 (73.7)	650 (48.2)

注.括弧内は%

▶ 男女比率はほぼ同じで、既婚者の方が約80%と多い。孫がいる人は全体で63.8%でした。

【孫育て】

次にお孫さんを育てることに参加される理由を複数回答で答えてもらいました。男女別、年齢別に比較したのが図1です。



注. 記号の意味: ▲1%水準で有意に高い, ▼1%水準で有意に低い, ∴10%水準の高い傾向がみられます。

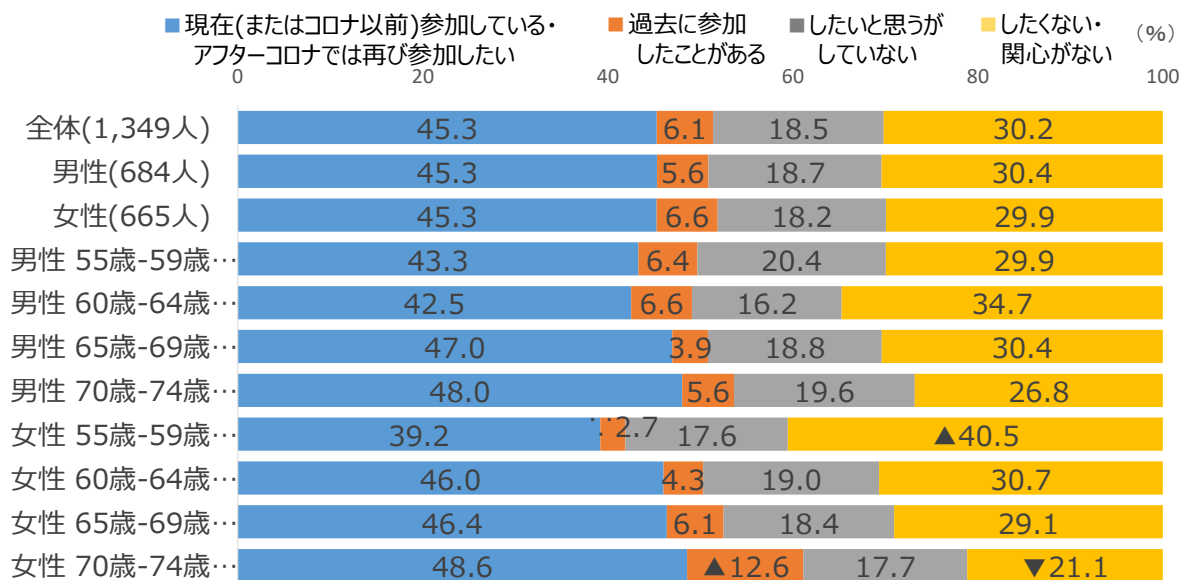
図1 孫育てへの参加理由

▶ 「お孫さんを育てることに参加される理由」は「孫の世話が楽しいから」が最も多くなってい

ました。年齢別に比較したところ、男性 65 歳-69 歳の年齢層では「孫の世話が楽しいから」が最も多く、男性 60 歳-64 歳の年齢層では「働いている母親のサポートをしたいから」が少なくなっていました。女性は 60 歳-64 歳の年齢層では「働いている母親のサポートをしたいから」がやや多くなっていました。

【ボランティアや子育て支援に関する団体への参加状況】

ボランティア団体や子育て支援に関するに団体に参加したことがありますかと問いました。



注. 記号の意味 : ▲ 1%水準で有意に高い、▼ 1%水準で有意に低い : 10%の低い傾向がみられます。

図2 「ボランティア団体」「子育て支援に関する団体」への参加

- ▶ 男女別・年齢別に参加状況を比較しました(図2)。女性 55 歳-59 歳の年齢層では「参加したくない・関心がない人」が多くなっています。女性 70 歳-74 歳の年齢層では「参加したくない・関心がない人」が他の年齢より少ない結果でした。男性ではどの年齢層でも大きな差が見られません。

次に、ボランティア団体への参加状況をコロナの感染拡大以前の日常生活、またはアフターコロナの日常生活を想定して答えてもらいました。

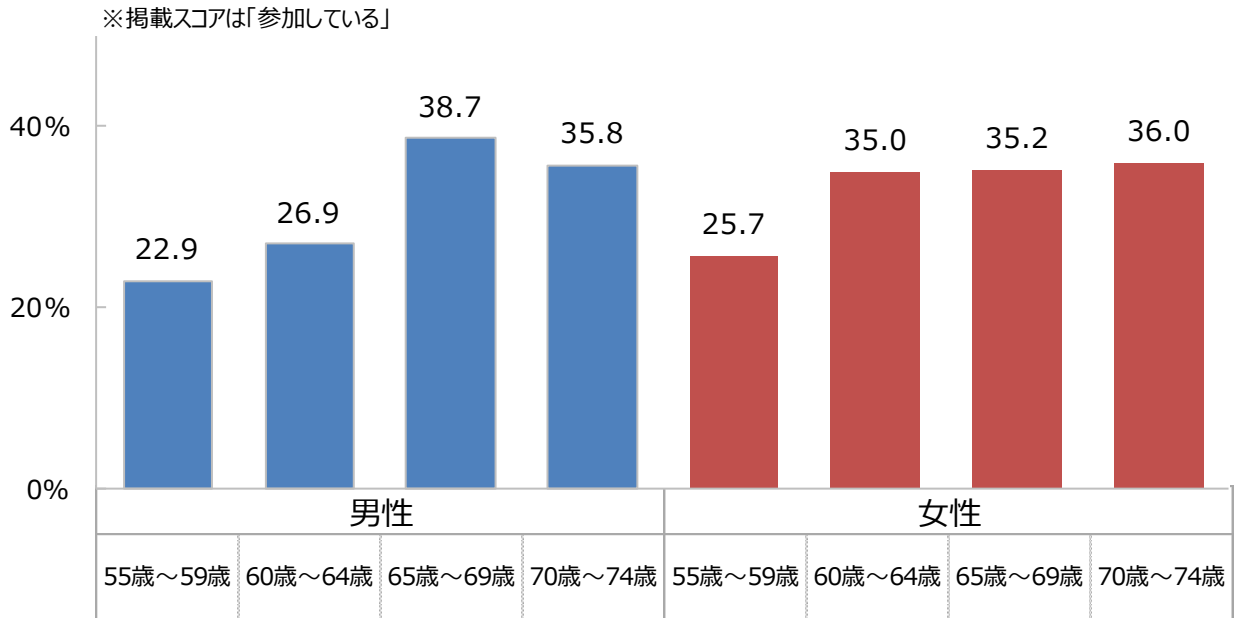


図3 ボランティア団体への参加状況 —男女別・年齢別の比較—

- ▶ 「ボランティア団体」への参加状況を年齢区分別に見たところ、男性では、65歳～69歳の年齢層が最も多く38.7%であり、次が70歳～74歳の年齢層の35.8%でした。女性は、60歳以上の3つの年齢層で35%以上となっていました。仕事を引退した後に、ボランティア団体への参加が増えているのかもしれませんが。

次に、「子育て支援に関わる団体」への参加状況を男女別、年齢別に見ました。

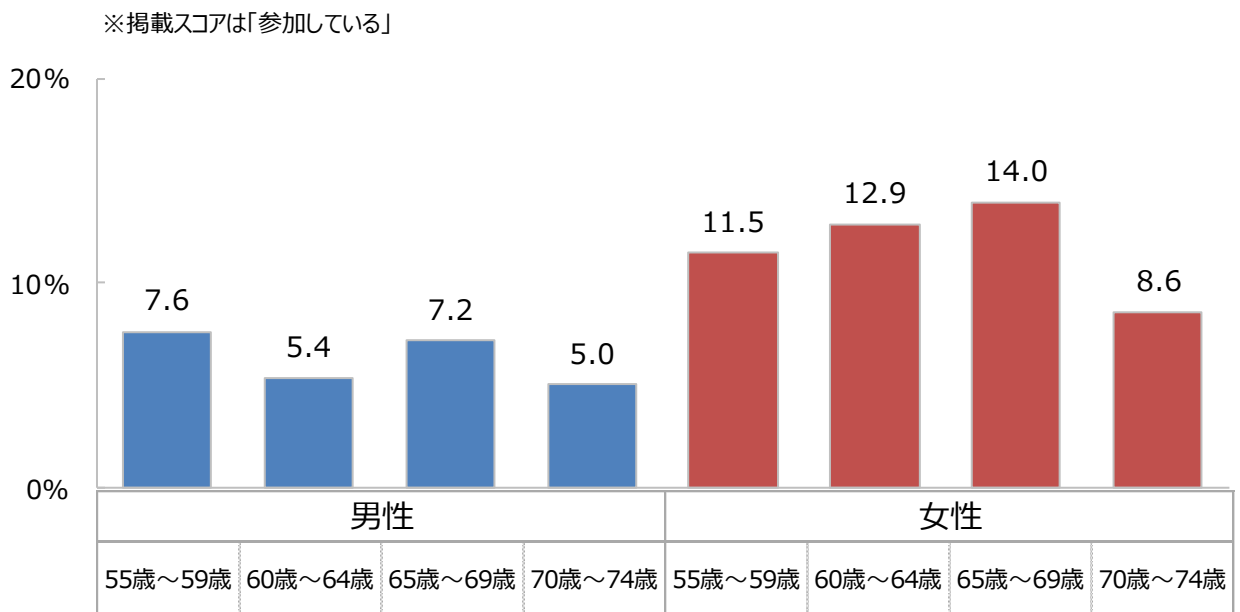


図4 「子育て支援に関わる団体」への参加状況 —男女別・年齢別の比較—

- ▶ 女性の方が男性よりも参加比率が高く、男女どちらも70歳～74歳の年齢層では低くなっていました。

【ボランティアや子育て支援に関する団体に**参加しない理由**】

「ボランティア団体」や「子育て支援に関する団体」に参加しない理由をみてみます。

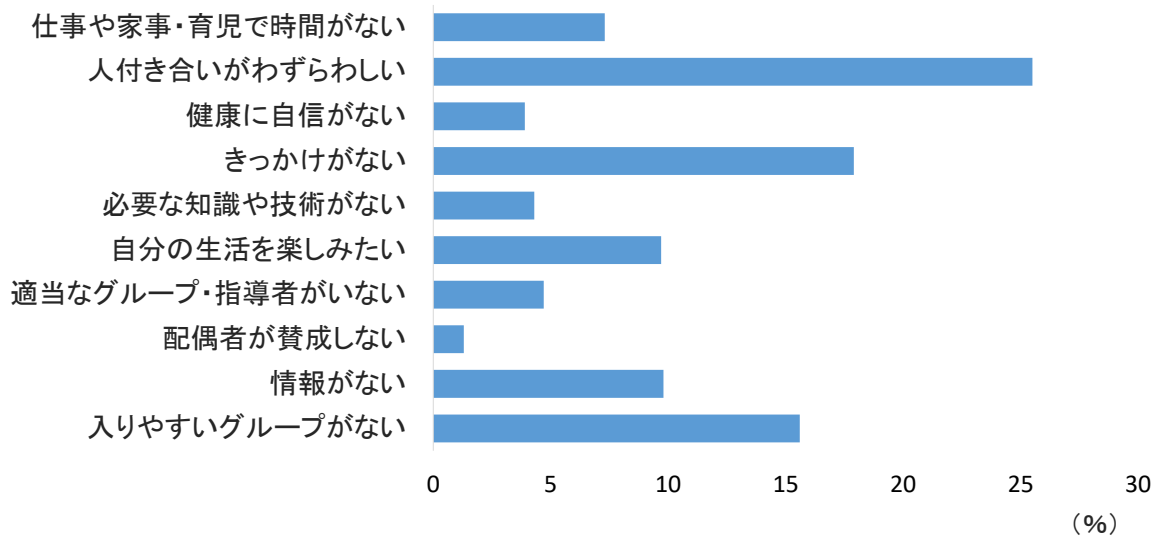


図5 「ボランティア団体」や「子育て支援に関する団体」に参加しない理由

- 「ボランティア団体」や「子育て支援に関する団体」に参加しない理由は、「人付き合いがわずらわしい」「きっかけがない」「入りやすいグループがない」の順に多くなっていました。

子育て支援に関わる団体に参加していない理由として、「入りやすいグループがない」と回答した人を男女別に比較しました。

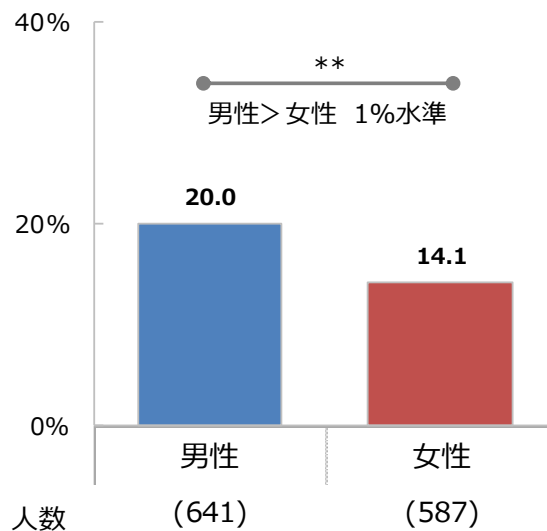


図6 子育て支援に関わる団体 「入りやすいグループがない」回答した比率—男女別—

- 子育て支援に関わる団体に参加をしていない理由として、「入りやすいグループがない」と回答

した人は、男性の方が女性よりも多くなっていました。

【どのような研修やワークショップがあればよいか】

子育て支援に関わるどのような研修やワークショップがあればいいと思うかを尋ねました。

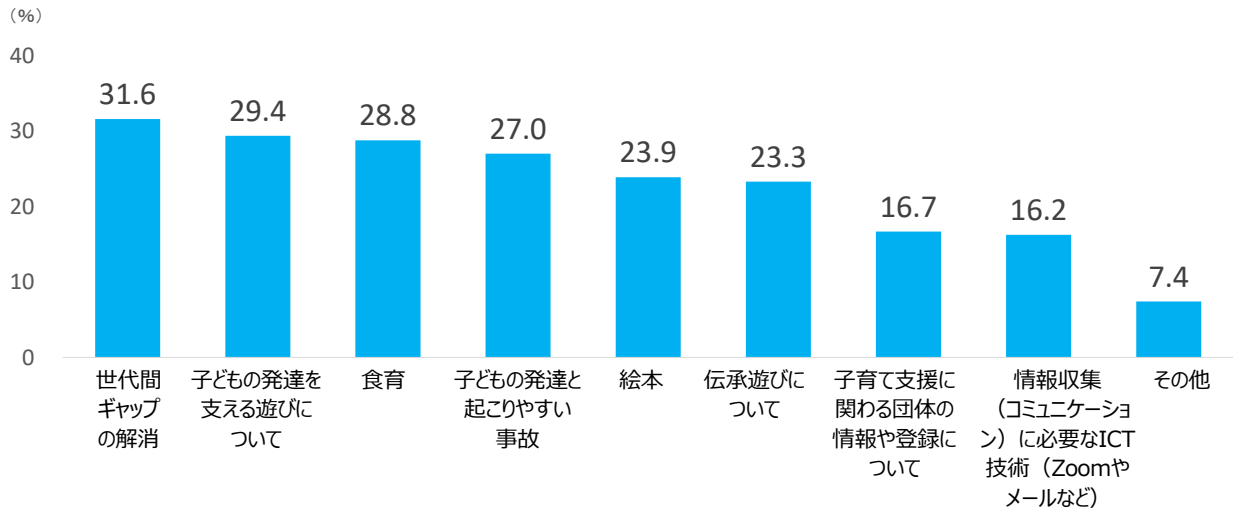
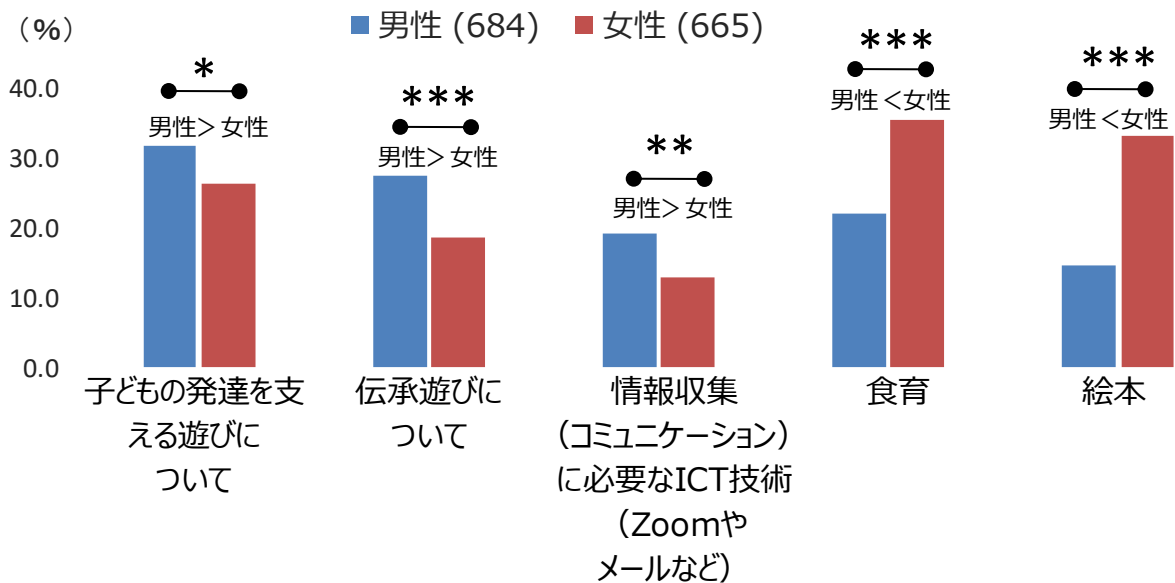


図7 子育て支援に関わる研修やワークショップの希望 (3つまで回答)

▶ 「世代間ギャップの解消」が31.6%と最も多くなっていました。

どのような子育て(孫育て)支援のワークショップを希望するか、性別によって差がみられたのは、次の5つです。



注. 記号の意味: * 5%水準で有意、** 1%水準で有意、***0.1%水準で有意

図8 どんな子育て(孫育て)支援のワークショップを希望するか—性別比較—

- どのような子育て(孫育て)支援のワークショップを希望するか内容に性差がみられました。男性の希望が多かったのは、「子どもの発達を支える遊びについて」「伝承遊びについて」「情報収集(コミュニケーション)に必要なICT技術(Zoomやメールなど)について」のワークショップでした。女性の希望が多かった内容は、「食育」「絵本」でした。

【他孫育て】

「他孫*育てへの興味関心」

*たまご(他孫)育ては、NPO法人孫育て・ニッポン理事長の棒田明子氏が提唱する、「血縁のない地域の若い子どもたちへの子育て支援」です。

地縁または自治体・NPO法人を通しての親族以外の子育て支援についてどう思うかを尋ねました。

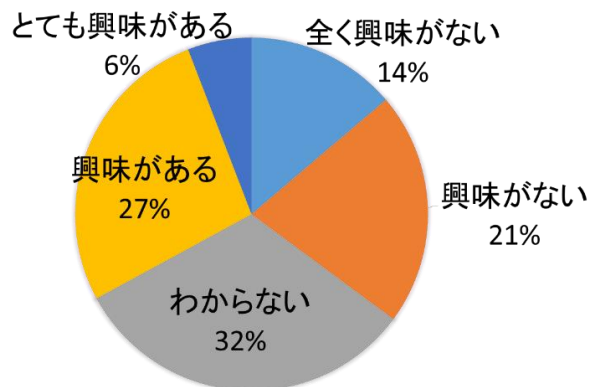


図9 地縁または自治体・NPO法人を通しての親族以外の子育て支援についての考え

- 「とても興味がある」と「興味がある」が合わせて33%、「全く興味がない」と「興味がない」が合わせて35%、「わからない」が32%とほぼ同じくらいの比率で3つに分けられました。

上の質問で「興味がある」「とても興味がある」と回答した方(444人)に、ボランティアなどを通して、親族以外の子育て支援に携わったことはありますか、と尋ねました。



図10 上の質問で「興味がある」「とても興味がある」と回答した方(444人)の内、ボランティアなどを通して、親族以外の子育て支援に携わった経験の有無

➤ 47%の人が「携わったことがある」と回答しました。

近年、祖父母（シニア）世代の「血縁者以外に向けた子育て支援」に目が向けられるようになりました。貴方は、親族以外の子育て支援についてどう思いますか。「他孫育てへの興味関心」を「1. まったく興味がない 2. 興味がない 3. わからない 4. 興味がある 5. とても興味がある」の5段階で尋ねました。性別による差は図 11 の通りです。

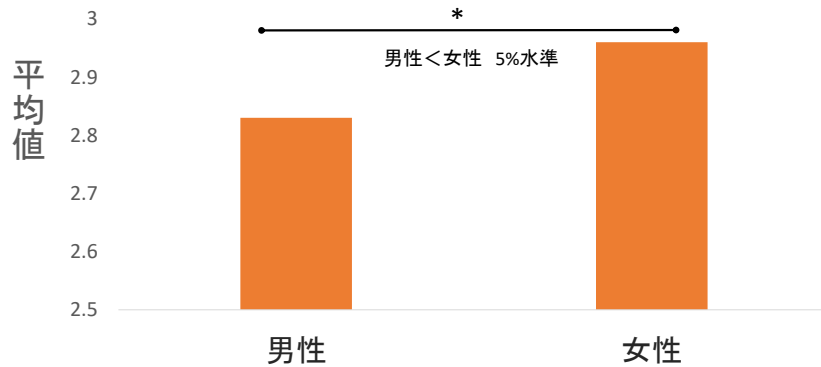


図 11 他孫育てへの興味関心—性別比較—

➤ 女性の方が男性よりも興味がある人が多い結果でした。

「他孫育てへの興味関心」の度合いを、① 血縁のある「孫有群」で「孫育てに参加している」群 ② 血縁のある「孫有群」で「孫育てに参加していない」群 ③ 孫なし群の3群で比較しました。

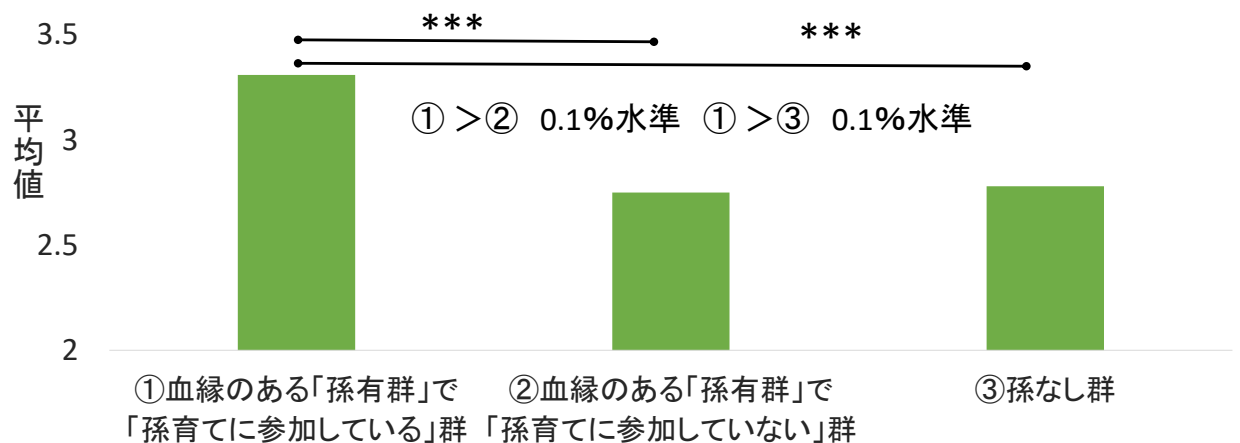


図 12 他孫育てへの興味関心—孫育て参加群、非参加群、孫なし群の3群比較—

➤ 孫育てに参加している群の「他孫育てへの興味関心」の度合いは他の2群よりも高くなっていました。

「孫との物理的距離」

お孫さんがいる方に孫とどのくらいの距離に暮らしているのかを尋ねました。

表2 孫との物理的距離

1 番近い孫との距離	同居	4. 8%
30 分		27. 2%
30 分から 1 時間		12. 0%
1 時間から 2 時間		10. 6%
2 時間以上		45. 5%

➤ 2 時間以上が最も多くなっていました。

孫との物理的距離を、同居から 1 時間未満を①孫近居群、1 時間以上を②孫遠方群の 2 群にわけて「他孫育てへの興味の度合い」を見ました。

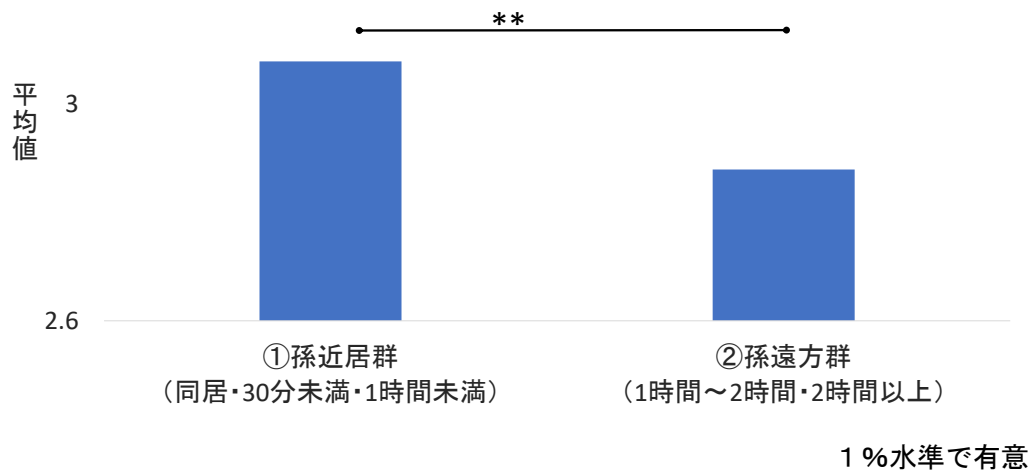


図13 他孫育てへの興味関心—孫との物理的距離比較—

➤ 孫が近くに住んでいる人ほど、「他孫育てへの興味」の度合いは高いことがわかります。

【高齢者の世代性】

丸島（2009）は、心理学者エリクソンの中年期の心理社会的な自我発達における「発達課題」について検討しています。そして、中年期の virtue（基本的徳目）である「世代性」について、「基本的には、次世代を確立させて導くことへの関心であり、生きとし生けるものに対する世話（care）に必要である」というエリクソンの概念を紹介していました。

世代性とは、次世代を確立させて導くことへの関心、下記の3つに分かれています。

第1因子 創造性（自己の個性性における関心と行動）

第2因子 世話（いろいろな世代の人々への関心と直接的な援助）

第3因子 世代継承性（象徴的な永遠の命を後世につなげたい欲求）

世代性尺度の3つのカテゴリー「創造性」「世話」「世代継承性」について「ボランティア団体」・「子育て支援に関する団体」の参加群と非参加群の2群で比較しました。「現在（またはコロナ以前）参加している・アフターコロナでは再び参加したい」を現在参加群、「過去に参加したことがある、したいと思うがしていない、したくない・関心がない」を非参加群としました。

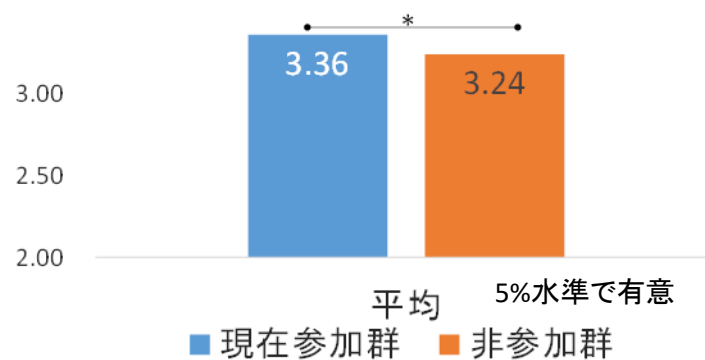


図14 「ボランティア団体」・「子育て支援に関する団体」参加群と非参加群の比較「創造性」

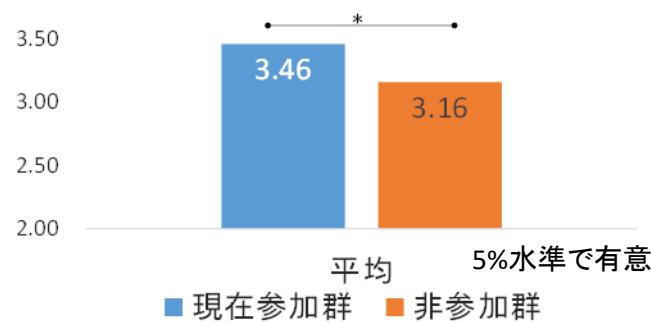


図15 「ボランティア団体」・「子育て支援に関する団体」参加群と非参加群の比較「世話」

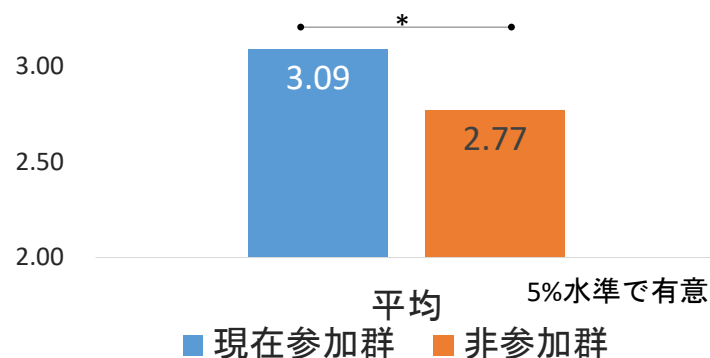


図 16 「ボランティア団体」・「子育て支援に関する団体」参加群と非参加群の比較「世代継承性」

- 「創造性」「世話」「世代継承性」について、いずれも現在参加群の方が非参加群よりも高くなっていました。

【総合考察】

本研究では、シニア世代の血縁のある、またはない孫育てに参加する規定因を検討しました。

調査会社を通じた調査ですので、ボランティア活動または子育て支援に関する団体の活動に「参加している・アフターコロナでは参加したい群」と「そうでない群」をスクリーニングして、ほぼ半数になるようにデータ収集を行い、二群の比較をしています。先行研究を参照し、55歳から74歳の男女を対象とし、年齢層と性別が均等になるように割り付けました。(図1)

図2において、「ボランティアや子育て支援に関する団体への参加状況」の年齢別、男女別データを見ると、女性では55歳から59歳の年齢層で、「したくない・関心がない」が高くなっています。背景には、この年齢層では仕事や家庭内役割の比重が高い可能性があります。また、70歳から74歳の年齢層で、「したくない・関心がない」が低いこともわかります。

また、図3「ボランティア団体への参加」において、65歳から69歳の男性の参加が最も高くなっています。図4を見ると、「子育て支援に関わる団体」への参加は、女性の方が男性よりも高く、ジェンダー差がみられます。性別役割分業意識の高いシニア世代では、女性の方が、子育て経験も多いことも背景にあることが考えられます。

高齢者の社会活動への参加を検討した先行研究(片桐, 2012)を参照し、「ボランティア活動や子育て支援に関する団体」に参加しない理由を尋ねました。「人づきあいがわずらわしい」「きっかけがない」「入りやすいグループがない」が上位を占めています。日本では依然と比べて地域の交流が少なくなっており、「人づきあいがわずらわしい」傾向は見出されています。しかしながら、「きっかけがない」「入りやすいグループがない」も多いことから、シニア世代を、ボランティア活動や子育て支援に関する団体につなげることができれば、シニア世代でボランティア活動や子育て支援に意欲はあるが、参加できないでいる人の活動を向上させることがわかります。

さらに、図6からは、男性のほうが、女性より、入りやすいグループがないと回答する傾向が高いことから、グループが見つければ、状況は変わる可能性があります。様々な自治体や、NPO法人の提供する研修やワークショップは、シニア世代の意欲を引き出すことができるのではないのでしょうか。

ではシニア世代はどのような研修やワークショップを希望しているのでしょうか。全体では「世代間ギャップの解消」を希望する人が最も多くなっていました。イギリス、オランダ、日本の祖父母と孫の交流を促進する要因を探る研究(佐藤, 2019; 2020)からは、「子ども世代と祖父母世代の価値観が一致すること」が大切であることが示唆されています。祖父母世代が、「世代間ギャップの解消」が大切であることを認識しており、またそのハードルは高いことが、明らかになりました。

興味深いのは、男性は、「遊び」や「情報収集（コミュニケーション）に必要な ICT 技術（Zoom やメールなど）」の研修を希望する傾向が高く、女性は、「食育」「絵本」への関心が高かったことです。育児期の男性が子どもの世話より、遊びを通して関わる人が多いことが明らかになっています（牧野ほか、2010）が、シニア世代でも同様の傾向が伺えます。

さて、血縁のない地域の小さなお子さんに関わる「他孫育て」ですが、約 3 割の人が、興味があると回答し（図 9）、関心のある人の約半分は実際に親族以外の子育て支援にかかわった経験があります（図 10）。

この「他孫育て」への関心は、どちらかと言えば、女性が高くなっています（図 11）。そして、中でも「血縁のある孫がいて、実際孫育てに参加している群」「孫との近居群」の興味の度合いが高い結果になりました（図 12、図 13）。

最後に、高齢者の「世代性」です。心理学の研究から、高齢期の人には「次世代を育成し、世話をする」ことが自我発達の一つの指標として示されています。

ボランティアや子育て支援に関する団体への参加群と非参加群の比較から、「世代性」の三つの側面である「創造性」「世話」「世代継承性」のいずれにおいても、参加群の発達が著しいことが示唆されました（図 14、図 15、図 16）。

以上のことから、シニア世代の子育て支援を促すには、そのきっかけやグループを提供する、研修やワークショップの紹介をするなどの情報提供が必要となることが明らかになりました。

本学の「少子高齢社会における地域の子育て・孫育て支援ガイド」に載せた、「子育て支援ボランティア情報」をご参照いただけましたら幸いです。

【引用文献】

- 片桐恵子 (2012). 退職シニアと社会参加 東京大学出版会
- 古谷野亘・柴田博・芳賀博・須山靖男 (1989). 生活満足度尺度の構造—主観的幸福感の多次元性とその測定 老年社会科学, 11, 99-115.
- 牧野カツコ・渡辺秀樹・船橋恵子・中野洋恵 (編) (2010) 国際比較に見る世界の家族と子育て ミネルヴァ書房
- 丸島令子・有光興記 (2007). 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性, 妥当性の検討. 心理学研究, 78(3), 303-309.
- 宮地由紀・泊祐子 (2005). 学童期の孫が祖父母に抱く親密性の関連要因 家族看護研究, 10(3), 87-94.
- 宮中文子・松岡知子・西田茂樹・岩脇陽子・中谷公子・中島健二 (1995). 中高年女性(祖母)の子育て参加の実態と心理的健康との関連について(第 1 報) 老年社会科学, 17(1), 21-29.
- 森田麻記子 (2017). シニアの社会参加としての子育て支援—地域のシニアを子育て戦略として迎えるための一考察 富士通総研 (FRI) 経済研究所研究レポート No.441
- 斎藤嘉孝 (2014). 祖父母むけ公的プログラムにおける効果評価とリクルーティング —“孫育て講座”に関する事例検討 法政大学キャリアデザイン学部紀要, 11 巻, 215-227.
- 佐藤淑子 (2019) 父母のワーク・ライフ・バランスと祖父母による孫育て - 日本とオランダの比

較 - 鎌倉女子大学学術研究所報, 第 19 卷, 77-88.

佐藤淑子 (2020) 父母のワーク・ライフ・バランスと祖父母による孫育てへの参加 - イギリスの現状と研究から考える - 鎌倉女子大学学術研究所報, 第 20 卷, 75-85.

【参考文献】

安藤 究 (2017) 祖父母であること 名古屋大学出版会

小林江里香・深谷太郎・原田謙・杉山陽・高橋知也・藤原佳典 (2016). 中高年者を対象とした地域の子育て支援行動尺度の開発 日本公衛誌, 63, 第 3 号, 101-112.

小松紗代子・斎藤 民・甲斐一郎 (2010). 孫の育児に参加する祖父母の精神的健康に関する文献的考察 日本公衛誌』, 第 11 号, 1005-1014.

丸島令子 (2009). 成人と心理学—世代性と人格的成熟. ナカニシヤ出版

中原純 (2011). 前期高齢者の祖父母役割と主観的 well-being の関係 心理学研究, 82, (2), 158 - 166.

佐々木尚之・高濱裕子 (編著) (2018). 三世代の親子関係 - マッチングデータによる実証研究 風間書房

佐藤真一・高山緑・増本康平 (2014). 老いのころ—加齢と成熟の発達心理学 有斐閣アルマ

杉山佳菜子・小川真由子・榊原尉津子 (2020). 地域による子育て支援としての孫育ての可能性—親子関係と主観的幸福感からの祖父母の意識の検討— 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 人文科学・社会科学編, 第 3 号, 179-192.

氏家達夫・高濱裕子 (2011). (編著) 親子関係の生涯発達心理学 風間書房

山下亜紀子 (2004). 育児支援者の動機付けに見る地域型育児支援の展望 国立女性教育会館研究紀要, 第 8 号, 39-50.